平成 26 年 7 月 2 日（水） 第 5 回 大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会	資料 1

第４回　大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会
議事要旨

開催日時	平成 26 年 3 月 13 日（木）　15:30～17:30
開催場所	大阪府安威川ダム建設事務所　５階　大会議室
出席者	久留飛委員、栃本委員、原田委員、養父会長〇、山﨑委員　計 5 名（欠席：池委員、角委員、長田委員、道奥委員）　（〇：会長、敬称略、五十音順）

概　　要　:【以下、〇委員　●事務局】

第１回安威川ダム環境改善放流検討部会の状況について及び安威川ダムの工事等における環境保全対策について審議した。

【資料１】「第３回大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会の議事要旨」

・第３回大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会の議事要旨について了承を得た。

【資料２】「第１回安威川ダム環境改善放流検討部会の状況について」

・資料２についての委員の主な発言は以下のとおり。

〇生物は季節によって反応が異なるので、放流の時期が重要である。

〇環境改善で何を改善するのかがあいまいである。何をターゲットにするかを明確にしなければ、すれちがいが起こる。

〇将来目標を掲げる必要がある。例えばアジメドジョウやオオサンショウウオといった種が生息していくためには、どういう条件が必要かを明確にしていく必要がある。

〇鉄やマンガンの流出が気になる。琵琶湖では問題になったが、ここでは問題ないのか。

〇しっかりモニタリングを行い、問題あれば対策をとっていくということになる。

〇モニタリングして、良くない何かがあった場合、どこまでなら大丈夫かという基準はあるのか。決めないといけないのでは。

〇将来目標を立て、指標性のある種でモニタリングを行うというところを今後詰めていく必要がある。

【資料３】「平成 25 年度の安威川ダム環境対策の取り組み状況について」及び
【資料４】「平成 26 年度工事予定内容と環境保全対策について」

・資料３及び資料４についての委員の主な発言は以下のとおり。

〇注目種という言葉が何回も出てくるが、対策としてはオオムラサキだけが優遇されているようだ。調査はただ単にいたということで終わるのか。何を保全しようとしているのか。

〇保全の目標像を決め、全体としての保全方針の計画及びそれに則った移植、放流などの具体策を記載していく必要がある。

●実行計画に注目種毎に対策一覧を整理している。今後実行計画の思想を審議会資料に明記します。

〇オオタカは希少性だけでなく上位種という観点からも重要である。調査結果では、本地区

のみが繁殖しており、周辺ペアが繁殖してないという結果が気になる。これは調査努力量の問題なのか。本地区の位置付けを明確にした上で、周辺地域も含めた地域個体群としての評価をして欲しい。

○保全対策としてヤマアカガエルをビオトープに移動しているが、移動先として大丈夫なのか。ビオトープで水抜けのリスクがある場合は、一部水が抜けない底がコンクリートの部分をつくってはどうか。最後にその場所が退避場所になる。

●ビオトープは自然豊かなということを目指しており、コンクリートを使用するのはイメージに合わないと考えていた。コストをかけて長続きさせていくという考えもあるので、今後検討していきたいと思います。

○加古川の支流杉原川につくられた多段式魚道では、上流側からの水が切れたが、魚道プール内に水が残り、魚が残った。「自然だけ」と考えなくても良いと思う。一度つくれば、人間が手を出さなくても生きていけるようになる。

○ダムができて生息面積が減少するが、絶滅する前に手立てを講ずる必要がある。水域を確保し、危険分散を図り、代償措置をすれば、上位種のオオタカの生息に繋がるのでは。どこかにハードを整備しないとだめで、考え方、方向性を示さないといけない。普通種の生息できる場所を増やす必要があり、イメージではなく面積の増加が必要である。食物連鎖の底辺が大事で希少種保全の考えだけではなく、場所の確保が重要である。

○代償措置をどうするかである。人工林を自然林に、盛土を植林に、沈砂池をビオトープ化するなどがあり、コストがどれだけかかるか算出していく必要がある。

●限られた用地ではあるが、水につからないスペースがあり、有効利用したい。また斜面地は復元の可能性があると考えています。

○オオサンショウウオの生息に関しては、砕石場のＳＳの問題を解決して欲しい。オオサンショウウオの若い個体が確認されていないことが気になっている。また、大岩川には落差30ｍの落差ができて本流と分断されている。生きものが流されたら終わりである。

○オオサンショウウオは指標種であり、ＳＳの問題だけではなく、河川構造をどうしていくかという目標に繋がっていく。どういう生物を対象に保全していくかを決める必要がある。

○オオタカが昼行性の猛禽類であるのに対し、フクロウは夜行性の猛禽類として重要である。この地域の生態系がどうなっていくか、何ができるか、積極的に何を改善しようとするかを考えていかなければならない。猛禽類が生息可能な生態系を残して欲しい。

○哺乳類の調査はどういう方法で実施しているのか。ビオトープの確認種が少ないが、実際は生息しているのでは。夜間自動撮影カメラを設置すれば、データがとれる。

○環境改善エリアで何ができるか、上位種の保全には食物連鎖の底辺となる種類の生息の場も必要。また、繁殖期に留意して保全する必要がある。次回審査会で目標像を示すよう進めて頂きたい。

以上